
談話におけるインドネシア語のヴォイス

——バリ島で話されているインドネシア語の談話の分析から[†]——

内海 敦子*

概 要

現在、インドネシアでは書記言語として形成されている国家語たるインドネシア語が津々浦々にいきわたっている状態である。地域によってはインドネシア語の変種がほとんどの地域住民の母語となり、二言語併用状態となっている。国家語として教育されているインドネシア語標準変種は、儀式におけるスピーチや改まった場においては用いられるが、日常生活においては、よりインフォーマルな変種が用いられている。

本論文においては、標準変種を基にしているものの、少々逸脱することもある日常的に用いられる「インドネシア語口語変種」の分析を行う。バリ島に居住するバリ語を第一言語とする人々が話す第二言語としてのインドネシア語の談話から、ヴォイス（文法的態）の選択においてどのような特徴が見られるかを年齢層ごとに分析し、インドネシア語口語変種の特徴を論じる。

1. インドネシア語の標準変種と他の変種

インドネシア語はムラユ語（英名 Malay）を基盤として成立した国家語である。ムラユ語を話す人々は21世紀前半の現在、3億人前後となっている。ムラユ語の様々な変種を話す人々の大多数は2017年現在人口3千万人を超えるマレーシアと2億6千万人を超えるインドネシアの両国に存在する。ムラユ語変種を国家語としているのはマレーシア、インドネシア、ブルネイの三か国であり、シンガポールでは四つの公用語のうち一つとされている。シンガポールとブルネイでは、英語名は「マレー語（Malay）」、ムラユ語名は「ムラユ語（Bahasa Melayu）」とされている。マレーシアでは「マレーシア語（Bahasa Malaysia、英語名は Malaysian）」、インドネシアでは「インドネシア語（Bahasa Indonesia、英語名は Indonesian）」と呼ばれており、それぞれ語彙や正書法に違いがみられる少し異なった変種で、国家語としてまた書記言語として整備されている。口語ではほとんど用いられない語、表現、文法的特徴を持っている。従って、多くの話者はそれらの呼称によって指示する対象を、書記言語たる威信の高い変種で教育機関で習得するべきものと考えている。

本論文ではインドネシア政府の機関である Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa

[†] 本研究は JSPS 科研費 JP15K02531 の助成を受けたものです。

* 日本文化学科 准教授 言語学

の規定した書き言葉としての言語変種を「インドネシア語標準変種」と呼ぶ。インドネシアにおける自然発生的なムラユ語の口語変種は、以下の二種類に分けられる。一つは「ムラユ語系民族語」、もう一つは「ムラユ語クレオール変種」と呼ぶ (cf. Adelaar 2005)。「ムラユ語系民族語」とは、スマトラ島やマレーシア半島に多く存在する諸言語で、ムラユ語の地域的な変種あるいは民族的な変種であるといえる。インドネシアではそれぞれの民族名を冠して呼ばれている。例としては、スマトラ島で話されているミナンカバウ語 (Bahasa Minangkabau) やクリンチ語 (Bahasa Kerinci) が挙げられる。もう一つの「ムラユ語クレオール変種」は通商用語として用いられていたビジネス的なムラユ語から発達してクレオール化した変種で、インドネシアでは主に東部に広がっている。ヌサ・トゥンガラ諸島、マルク諸島、スラウェシ島、パプア島西部 (インドネシア領パプア州、旧名イリヤン・ジャヤ州) で用いられているムラユ語の口語変種や、ジャワ島の首都ジャカルタ周辺およびその近郊 (ジャボデタベック、Jabodetabek¹⁾) で話されている口語変種も様々な言語の話者が話すことにより形成されたクレオールであると考えられる。

これらの「ムラユ語系民族語」と「ムラユ語クレオール変種」はそれぞれ広い地域に分布しているが、そのどちらもあまり話されていない地域もある。本論文のデータが採集されたバリ島もその一つである。バリ語が多くの人々の第一言語であるバリ島や、ジャワ語あるいはスダ語が多くの人々の第一言語であるジャワ島 (ジャカルタ周辺やバンドゥンなどの大都市を除く) においては、上記のムラユ語変種の第一言語話者はかなりの少数派である。これらの地域ではインドネシア語の標準変種の他に「インドネシア語口語変種」と呼べる変種が話されている。この変種は、書記言語や非常に格式張った場面以外で話されるインドネシア語は標準変種をもとにしているものの、実際に発音するときには各地の民族語の影響を受ける。結果として、音韻の変異 (若干の母音と子音の変異、およびストレスの位置の変異) があるものの全体としてそれほど顕著な地域差はない。ただし、語彙はそれぞれの地域の民族語の影響を受けることもあり、否定辞などの機能語においても若干の地域差がある。この「インドネシア語口語変種」はある程度の公的教育を受けなければ習熟できないもので、テレビなどの放送、教育機関、政府などの公的機関において用いられる。「ムラユ語系民族語」や「ムラユ語クレオール変種」が話されている地域でも公的な場で使用されている。

筆者は2016年度にバリ島で話されている「インドネシア語口語変種」の調査を行った。本論文はそこで得られた談話資料を基に、ヴォイス (文法的態) の選択を分析した。以下ではインドネシア語におけるヴォイスとバリ島で得られた資料におけるヴォイスの選択について述べる。

2. インドネシア語におけるヴォイス

2.1 ヴォイスの形態的特徴

インドネシア語のヴォイスは二つあるいは三つと言われる。まず、Sneddon 2010にあるように二つとする立場では Active Voice と Passive Voice を認める。典型的には Active Voice の主語の意味役割は Actor であり、動詞には接頭辞 *meng*-²⁾ (あるいはその異形態) が付加する。Passive Voice の主語は典型的には Patient であり動詞に後接し、動詞には接

頭辞 *di-* が付加するか代名詞が付加する。Passive Voice の Actor が 1 人称と 2 人称の場合には別の構文をとる。1 人称あるいは 2 人称の代名詞が動詞の bare form (接辞が何もついていない形) に前接する。この二つの Passive Voice を人称によって構文が異なると考え、両方 Passive Voice とし、区別する必要があるときは動詞に接頭辞 *di-* が付加する構文を Passive Voice one, 代名詞が接頭辞が付加しない動詞に前接する構文を Passive Voice two という。

これに対し、Macdonald and Dardjowidyojo 1967, Chung 1976 では、Active Voice, Passive Voice, Object Voice の三つの態があるとする立場である。Active Voice に関しては上記と同様であるが、Passive Voice のうち、動詞に接頭辞 *di-* が付加し Actor が動詞に後接する構文を Passive Voice とし、1 人称あるいは 2 人称の代名詞が接頭辞が付加しない動詞に前接する構文を Object Voice とする。

以下の例 (1) a が Active Voice、(1) b が Passive Voice one あるいは Passive Voice, (1) c が Passive Voice two あるいは Object Voice の例である。(1) c は標準変種においては 1 人称か 2 人称がとる構文とされている。なお、以下の例文ではインドネシア語の正書法にならない、軟口蓋鼻音 [ŋ] は ng、硬口蓋鼻音 [ɲ] は /ny/ であらわす。

- (1) a. *Tira men-cuci baju*
Tira AV-wash clothe
Tira washes clothe. (Active)
- b. *Baju itu di-cuci Tira*
clothe that PV-wash Tira
That clothe was washed by Tira. (Passive one/ Passive Voice)
- c. *Baju itu saya cuci*
clothe that 1sg wash
That clothe was washed by me. (Passive two/ Object Voice)

本論文では能動態と受動態のどちらが談話に多くみられるかを問題にしてい。そのため、第 5 節以降の分析では Passive Voice と Object Voice の二つを区別せず、両方 Passive Voice として扱う。ただしこの節においては議論をわかりやすくするため、Passive Voice と Object Voice という用語を用いる。

次に、インドネシア語の様々な変種における動詞に付加する接辞について述べる。第一節で「インドネシア語標準変種」と述べた変種においては、Object Voice にて現れる動詞、あるいは命令形として用いられる動詞のみが接辞なしの bare form で用いられる。Active Voice の動詞は少数の bare form でしか用いられない自動詞を除いて、接頭辞 *meng-* が付加する。Passive Voice の動詞には必ず接頭辞 *di-* が付加する。

これに対し、「ムラユ語系民族語」や「ムラユ語クレオール変種」においては bare form の動詞が Active Voice の文においてよく用いられる。また、*meng-* のうち /me/ の部分がなくて /ng/ の部分のみが実現している (つまり動詞の語基の最初の子音が鼻音化しているか /ng/ が付加している) 形もよく用いられる。(2) はマレーシア、サラワク州で話されて

いる「ムラユ語クレオール変種」の一つ Kuching Malay の例である (Cole et al 2008 より引用)。「書く」という動詞の語基は *tulis* であるが、以下の例 (2) における *nulis* は /me/ の部分がなく、語基の最初の子音が鼻音化した例である。

- (2) ali nulis nok tok
 Ali N. write this. one PART
 Ali wrote this one

これに対し、Passive Voice においては *di-* が必ず付加する。同じく Kuching Malay においては例 (3) のように動詞の語基の最初の子音が鼻音化しているが、*di-* は付加している。

- (3) buk ya di-nulis
 book that PV-write
 That book was written

以下の分析では *meng-* が付加した動詞を Active Voice とし、*di-* が付加した動詞を Passive Voice とする。代名詞が先行する接辞が付加していない動詞、つまり Object voice も Passive Voice として数える。

インドネシア語標準変種においては、接頭辞が付加できない少数の動詞を除いては、例 (1) に挙げたように、Active Voice と Passive Voice には必ず接頭辞が付加する。Active Voice の自動詞には *ber-* という接頭辞が付加し、他動詞には上記の *meng-* が付加する。Passive Voice には接頭辞 *di-* が付加するが、その他、受動態に近い意味を表す接頭辞 *ke-* と *ter-* が付加した動詞もある。接辞が付加しない動詞は命令形あるいは Object Voice における代名詞に後続する場合のみ現れる。

しかし、「インドネシア語口語変種」においては接頭辞 *ber-* や *meng-* が付加しない動詞が Active Voice の動詞として現れることが頻繁にある。「インドネシア語標準変種」と「インドネシア語口語変種」の形態的な違いは主にこの Active Voice の動詞の接頭辞の有無に現れる。

2.2 Classical Malay におけるヴォイスの選択

インドネシア語の基となったムラユ語は、Old Malay 期、Classical Malay 期、Pre-Modern Malay 期、Modern Malay 期、などに分けて論じられることがある (Andaya 2001, Sneddon 2003 他)。Old Malay は 7~14 世紀、Classical Malay は 14~18 世紀、Pre-Modern Malay は 19 世紀、Modern Malay は 20 世紀以降というのが大体の年代である。このうち書記言語として成立した後の Classical Malay と Pre-Modern Malay に関しては特に数多く資料が残っている。

Cumming 1991 は、18 世紀から 19 世紀のムラユ語 (英名 Malay) に関する分析を行っている。そのうち、いくつかの事態が続く eventive clauses においては、Passive Voice が好まれるという考察を行っている。典型的には、最初の事態が Active Voice の文であらわさ

れ、それに続く事態 Passive Voice であらわされる。このように態が変わる場合は、ほとんど Active Voice の文において定性を持つ目的語が現れており、後続の Passive Voice の節においては最初の節の目的語が統語上の主語となって現れる。例 (4)、(5) がこの例である。(4) では *Indraputra* (人名) と *merak* 「クジャク」が言及され、その直後に続く例 (5) でそれらが再度現れている。(5) の最初の Active Voice の節では *merak* が主語として表れ、*Indraputra* が目的語として表れている。後続の節においては表層には表れていないが *Indraputra* が統語上の主語となり、動詞は Passive Voice で現れている。Passive Voice の動詞に後接している接続形の三人称単数の代名詞が *merak* を指している。つまり、動詞のヴォイスに関しては直前に現れた名詞を主語として成り立つ形が選択される。

(4) *Hatta dalam berkata-kata maka Indraputra pun turun dari ribaan ayahanda baginda pergi melihat merak emas minggal di atas talam itu.*

‘As they were talking, Indraputra got down off his father’s lap to go see the golden peacock strutting on the tray.’

(5) *Maka tiba-tiba merak itu pun me-nyambar Indraputra*
 LNK suddenly peacock that EMP AV-seize *Indraputra*
seraya di-terbangkan=nya.
 while PV-fly=3sg

‘Suddenly the peacock snatched Indraputra and flew off with him.’

(from *Hikayat Indraputra*, Ali bin Ahmad version, taken from Cumming 1991 pp 134–135.)

これに対し、20 世紀後半以降、インドネシア標準変種が制定されて以降は、なるべく主語をそろえるような指導がされている。例えば 2008 年に発行された小説、*Laskar Pelangi* においては以下例 (6) のように、最初の節において目的語 (*tetangga=nya*、「隣人」) がはっきり示されている場合にも、それに後続する節の主語は最初の節の主語 *beliau* (三人称単数の代名詞) と同一となっている。untuk「～のために」で導入されている目的節においても最初の節の *beliau* を主語とする Active Voice が現れている ([] 内は関係節)。

(6) *Setiap hari beliau me-nunggu tetangga=nya* [yang me-miliki
 every day 3sg AV-wait neighbor=3sg [REL meN-have
perahu atau juragan pukut harimau] *me-minta=nya*
 boat or skipper trawl tiger] AV-ask=3sg
untuk mem-bantu mereka di laut.
 for AV-help 3pl at sea

(from *Laskar Pelangi*, Andrea Hirata 2008, p 100)

現在のインドネシア語の文章はおおむね (6) のように主語をそろえる方向で書かれてはいるものの、実際にすべての話者が標準変種の規範通りに eventive clauses における態の選

択をしているわけではない。伝統的な態の選択をする話者も存在する。第5節以下ではバリ語を第一言語として育ち人生のほとんどをバリ島で過ごしている人々が、どのような態の選択をしているかを考察する。

3. バリ島における社会言語学的状況

バリ島においてはもともと居住していた人々はバリ語を第一言語としているが、現在ではジャワ島やマドゥラ島からも多くの人が移り住んでいる。観光業が盛んなので、外国人の居住者も多い。従ってジャワ語やマドゥラ語を第一言語としている人々も居住しているし、インドネシア語が共通語として必要とされる状況も多い。特にバリ州の州都であるデンパサールでは多くの民族が暮らしているため、小中学校の授業時間だけでなく休み時間においてもインドネシア語が一番多く用いられるという状況になることも珍しくない (cf. 鏡味 2009)。

バリ語には尊敬語の体系が存在し、儀式や改まった場面で用いられる High Variety には尊敬語が不可欠である。日常的に用いられる Low Variety においても目上の人に対しては尊敬語を用いなければならないが、話者と同等以下のものと話すときにはその必要はなく、気軽に用いることができるので、バリ人の同等の者同士や家族など親しい者同士で話す場合には一番多く好まれる変種である。しかし、High Variety が必要とされる場面や、バリ・ヒンドゥーにおける伝統的な階級の上下か職業上の上下のどちらによって敬語を選択するか、葛藤が生じる場面などでは、インドネシア語を主に使い、互いに小辞などに敬意を表すバリ語を使用して面倒を避けつつ丁寧さを示すなどのストラテジーがとられることがある (原 2009)。従って、バリ語を第一言語するコミュニティの中でも、インドネシア語も頻繁に用いる二言語併用状態が存在している。

バリ島でバリ語を第一言語とする話者によって用いられているインドネシア語の変種は第一節で述べた用語を用いると基本的に「インドネシア語標準変種」と「インドネシア語口語変種」であるといえる。「インドネシア語標準変種」は儀式など非常に格式張った場面で用いられ、「インドネシア語口語変種」は教育現場や役所などの公的な場面を中心に多くの場面で用いられている。本論文で扱うデータは次節で説明するように「ビデオの説明」というレジスターで用いられたインドネシア語であるので、それほど格式張った場面とは認識されていないものの、外国人の筆者がいる場面で発話しているので、ある程度標準語を意識しているはずであるが、バリ語の単語なども混じることがあった。また、社会的な上下関係はほぼ関係ない場面である。以上のことを考慮すると「インドネシア語口語変種」であるといってよいと考えられる。以上をまとめると、本論文の考察対象となるデータは、バリ語を第一言語、インドネシア語を第二言語とする話者が、少し改まったレジスターで発話した「インドネシア語口語変種」である。

4. 分析対象の談話資料

本論文で分析対象としたデータは、バリ語を第一言語、インドネシア語を第二言語とする話者に、インドネシア語で三つの短いビデオの説明をしてもらったもので、2016年度に採

録した。ビデオはすべて塩原朝子氏³⁾によって撮影され編集されたものである。第一のビデオは女の子が「バナナを手に取り」、「皮をむいて」、「半分食べる」という事態が起きるものである。第二のビデオの中では女の子が「卵を割り」「卵をかき混ぜ」「牛乳を注ぎ」「さらに混ぜる」という事態が生じる。第三のビデオの中では女の子が「牛乳瓶のふたを開けて」「牛乳をコップに注ぎ」「コップから牛乳を飲み」「ティッシュで口をふく」という事態が生じている。

第2節でみたように、いくつかの事態が続けて生じる場合は、最初の節が Active Voice、後続の節が最初の節の目的語を統語上の主語とする Passive Voice で表現されるのが18～19世紀ごろの文献に見られる伝統的な態の選択である。しかし、近年の教育現場や改まった文章においては最初の節が Active Voice であるならば、その節の主語を後続の節でも主語として用い、Active Voice が続くことが多い。

以下では、分析対象とする談話資料において Active Voice – Passive Voice の態の選択が多いか、Active Voice – Active Voice の態の選択が多いかを考察していく。

話者は1944年生まれから2000年生まれの合計16人である。1940年代生まれが1人、1950年代生まれが4人、1960年代生まれが3人、1980年代生まれが3人、1990年代生まれが3人、2000年代生まれが2人である。このうち女性が9人、男性が7人である。教育程度は全員が高校は卒業しており、大学卒も含まれているので、インドネシアにおいては高学歴層であるといえる。次節での分析では、1940年代から1960年代生まれの8人を高齢層、1980年代以降に生まれた8人を若年層として比較する。

5. 談話資料における態の選択

5.1 選択された Active Voice と Passive Voice の割合

第2.1節で述べたように、「インドネシア語口語変種」においては接辞のない Active Voice の動詞が用いられることがある。インドネシア語においては接辞が付加することのない動詞が少数存在するが、本論文が対象としている資料においては接辞が付加しない Active Voice の動詞は *makan* 「食べる」と *duduk* 「座る」以外には出てこない。また *makan* はそもそも *kan* という「食べる」を意味する語基に Active Voice の接辞 *meng-* が付加した形態がそのまま化石化して *makan* となったものであるが、下記の例(9)にみられるように *makan* を語基と再分析して *meng-* が付加した形の *me-makan* が用いられることもある。以下の表1では Active Voice の接頭辞 *meng-* が付加した動詞と、接辞がなにも付加していない動詞(以下 bare verb と呼ぶ)と、Passive Voice の接頭辞 *di-* が付加した動詞の3つに分けて割合を示す。なお、Object Voice は現れていない。

Active Voice の動詞は *ber-* が付加したもの、*meng-* が付加したもの、語基の最初に鼻音化だけが起きているものの3種類に分けた。接頭辞 *di-* が付加したもののみを Passive Voice の動詞として分類し、受動的な意味を持つ動詞を形成する接頭辞 *ter-* と *ke-* が付加したものはその他として分けて示した。いつも接頭辞なしで現れる動詞は bare verb として分類した。ビデオの説明として現れる談話において現れた bare verb はほとんどがヴォイスを表す接頭辞を付加することができない動詞であったが、少数の例外もあった。例えば *per-*

caya「信じる」*respek*「尊重する（英語の respect から）」のような思考を表し従属節を導く動詞がその例外である。ビデオの中で起きた事態を説明する動詞に関してはヴォイスを表す接辞が付加することができない動詞以外は bare verb で現れていない。

16 人の話者から採集した談話において、節は 349 あり、そのうちの 217 が動詞を含む節であった。複数の動詞が連続する場合はそれぞれ別の節として数えた。表 1 にあるように 217 の動詞のうち Active Voice は 142 で、65.4% を占める。Passive Voice の動詞は 50 で 23% である。bare verb は 18 しかなく、8.2% であった。その他の動詞の形態は 7 で 3.2% であった。

表 1：ヴォイスにかかわる形態の割合

	ヴォイスごとの動詞の数と割合	動詞の形態	形態ごとの動詞の数
Active Voice	142 65.4%	接頭辞 <i>meng-</i> が付加した動詞	135
		接頭辞 <i>ber-</i> が付加した動詞	6
		語基の最初が鼻音化した動詞	1
Passive Voice	50 23%	接頭辞 <i>di-</i> が付加した動詞	50
Bare verb	18 8.2%	語基のみの動詞	18
その他	7 3.2%	接頭辞 <i>ter-</i> 、 <i>ke-</i> が付加した動詞など	7
合計			217

また、Active Voice と Passive Voice のヴォイスをあらわす接辞を持つ動詞の数、合計 192 を母数とすると Active Voice は 74%、Passive Voice は 26% である。つまり、圧倒的に Active Voice が多く用いられていることがわかる。

5.2 節の連なりにおけるヴォイスの選択

5.2.1 ヴォイスの連続のパターン

分析対象の談話資料においては以下の三つのヴォイスの選択のパターンが見られた。(A) のパターンは Active Voice の後に Passive Voice が続くが、それぞれ表層に主語となる名詞が現れている。(B) のパターンには Active Voice の後に Passive Voice が続くところは (A) のパターンと同様だが、Active Voice の目的語が Passive Voice の主語としては明示されない。第 2 節で述べた 18～19 世紀の伝統的なムラユ語においてはこの (B) のパターンが頻出する。(C) のパターンは Active Voice がいくつも続くもので、20 世紀後半以降のインドネシアの教育現場で推奨されているパターンである。

- (A) 最初の節が Active Voice、後続の節が Passive Voice で、Passive Voice の主語が明示されている
 - (ア) 最初の節には Actor が主語、Patient が目的語として現れる
 - (イ) 後続の節には Patient が主語として表層に現れる
 - (ウ) 主語と動詞の形はすべての節において対応している

(B) 最初の節が Active Voice、後続の節が Passive Voice で、Passive Voice の主語が明示されていない

(ア) 最初の節には Actor が主語、Patient が目的語として現れる

(イ) 後続の節には Patient が主語として表層に現れていない

(ウ) 主語と動詞の形は Active Voice の文においては対応しているが、Passive Voice の文においては Patient が表層に現れていない。当然、最初の節の主語と Passive Voice の動詞は対応しない。

(C) 最初の節が Active Voice、後続の節も Active Voice

(ア) 最初の節には Actor が主語、Patient が目的語として現れる

(イ) 後続の節は Actor を統語上の主語とするが、その Actor は主語として表層に現れていないことが多い

(ウ) すべての節において最初の節の主語と動詞が対応している

例の (7) は (A) のパターン、例 (8) は (B) のパターン、例 (9) は (C) のパターンの例である。例 (8) の最初の節では Active Voice が現れている。次の節の最初に *pisang* 「バナナ」が現れ、それを統語上の主語として Passive Voice の動詞が続く。例 (8) においては最初の節には Active Voice の動詞が現れ、Actor である *anak kecil* 「小さな子ども」と Patient である *pisang* 「バナナ」が現れている。そのあとの節には主語が現れていないが *pisang* を統語上の主語として Passive Voice の動詞「食べられる」が来ている。

(7) *seorang anak perempuan duduk meng-hadap meja yang*
 one.CL child female sit AV-face table REL
ada pisang.
 exist banana

‘One girl sits facing the table on which there are bananas’

pisang di-ambil, terus di-kupas, sudah di-kupas,
 banana PV-take then PV-peel already PV-peel
di-makan.

PV-eat

‘Banana was taken, then peeled, (when) already peeled, eaten’

(1952 年生まれ、女性)

(8) *anak kecil me-ngupas pisang lalu di-makan*
 child small AV-peel banana then PV-eat

‘A small child peels banana, then eaten’ (1950 年生まれ、男性)

(9) *seorang anak kecil yang sangat mandiri me-ngupas*
 one.CL child small REL very independent AV-peel
pisang dan me-makan=nya sangat lahap.
 banana and AV-eat=3sg very hungrily

‘A small child who is very independent peels a banana and eat it as if she is very

hungry’
(1996 生まれ、女性)

次の 5.2.2 節にて、談話資料に見られる連続する節のヴォイス選択のパターンを考察する。

5.2.2 談話資料における連続する節におけるヴォイス選択

前節で分類した (A)、(B)、(C) のパターンを、談話資料においてそれぞれいくつあるかをまとめたものが表 2 である。例 (10) のような文章の場合、(B) パターンの Active Voice – Passive Voice (主語は明示されていない) の連続が 2 つ生じているので、(B) パターンを 2 つとして数えた。

- (10) pertama anak ini me-mecah-kan telur kemudian di-kocok
first.time child this AV-break-APL egg then PV-stir
dan me-nambah-kan susu sambil di-kocok kembali
and AV-add-APL milk then PV-stir again
‘First, this child breaks an egg and stirred. Then, (she) adds milk then stir again’
(2000 年生まれ、女性)

表 2：連続する節におけるヴォイス選択のパターン

ヴォイス連続のパターン	数	割合
(A) のパターン Active—Passive、Passive の主語は明示されている	9	16%
(B) のパターン Active—Passive、Passive の主語は明示されていない	15	26%
(C) のパターン Active—Active	32	57%
合計	56	100%

次に、高齢層と若年層に分けて連続する節のヴォイス選択のパターンを見ていきたい。
表 3 は高齢層のパターン、表 4 は若年層のパターンである。基本的には一人の話者が 3 つのビデオの説明を行っているので、最低 3 つの節の連続が存在する。しかし、例 (14) のように 1 つのビデオの説明の中に 2 つの連続が認められるものもあるので、一人の話者に 4 つ、5 つのパターンを認めている場合もある。また、一つの節しか発話しなかった場合はどのパターンとしても数えていないので 0 となる。

表 3 に示したように、高齢層は (A) パターンを 26%、(B) パターンを 30% と、大体同じ割合で選択している。(C) パターンは 44% と若干多めである。ここで、(A) と (B) を Active-Passive の連続とみてまとめると、56% となり、(C) の Active-Active のパターンより若干多いということがわかる。

これに対し、表 4 の若年層の選択においては、(A) パターンが 7%、(B) パターンが 24

% といずれも少なく、(C) パターンが69% とかなり多くなっている。(A) と (B) の Active-Passive のパターンをまとめると31% となり、(C) の Active-Active のパターンの半分弱であることがわかる。

このように、年齢層を分けて観察すると、若い話者ほど「インドネシア語標準変種」で規範的とされているヴォイスの選択をする割合が多いことがわかる。

表3：高齢層の連続する節におけるヴォイス選択のパターン

生年	連続する節におけるヴォイス選択			
	(A) パターン	(B) パターン	(C) パターン	
1944	1	3	1	4
1950	1	0	1	2
1950	0	1	3	4
1951	4	0	0	4
1952	1	2	0	3
1961	0	0	3	3
1968	0	2	1	3
1969	0	0	3	3
合計	7	8	12	27
割合	26%	30%	44%	100%

	Active - Passive の連続	Active - Active の連続	
合計	15	12	27
割合	56%	44%	100%

表4：高齢層の連続する節におけるヴォイス選択のパターン

生年	連続する節におけるヴォイス選択			
	(A) パターン	(B) パターン	(C) パターン	
1981	0	1	1	4
1982	0	0	1	2
1985	0	0	3	4
1991	1	2	0	4
1992	0	1	0	3
1996	1	0	3	3
2000	0	2	1	3
2000	0	1	3	3
合計	2	7	20	29
割合	7%	24%	69%	100%

	Active - Passive の連続	Active - Active の連続	
合計	9	20	29
割合	31%	69%	100%

6. まとめ

現在のバリ島に居住するバリ人はおおむねバリ語を第一言語としているが、第二言語としてのインドネシア語を用いる場面も多い。インドネシア語はムラユ語を基盤とし、国家語として制定された言語である。バリ島では主に「インドネシア語標準変種」が非常に格式張った場面で用いられ、日常的にはもう少し改まり度の低い「インドネシア語口語変種」が用いられている。

第二言語として話される「インドネシア語口語変種」は、話者の第一言語や受けた教育によって影響を受ける。本論文で分析対象としたインドネシア語の談話はバリ島に居住するバリ人が発話したものである。合計16人の話者（1949年～2000年生まれ）に、動作者が行ういくつかの連続する動作の説明をしてもらった。その談話資料における動詞のヴォイスの選択と、連続する節におけるヴォイスの組み合わせのパターンを分析した。

「インドネシア語標準変種」においては、Active Voiceの動詞は少数の例外を除き接頭辞が必ず付加するが、ビデオの内容を説明するというレジスターにおいては、ほとんどの話者が接頭辞を落とさず、形態的には標準変種に近い形が選択されることが分かった。この点においては話者の年代による差も認められなかった。

動詞は、ヴォイスを表す接辞が付加した動詞を母数とするとActive Voiceが74%程度、Passive Voiceが26%程度となり、圧倒的にActive Voiceが多いことが分かった。これは最初の節が必ずActive Voiceで述べられることや、自動詞はActive Voiceしか取れないことから妥当な結果といえる。

連続する節において、どのようにヴォイスが選択されるかの分析を行ったところ、1940年代から1960年代に生まれた高齢層と1980年代から2000年に生まれた若年層の間に差がみられた。18～19世紀のムラユ語（インドネシア語の基となった言語）においては最初の節がActive Voice、後続する節がPassive Voiceであらわされることが多いが、高齢層の発話においてはこのパターンが56%であった。現在のインドネシア語の教育現場において推奨される、Active Voiceの主語を固定し後続する節もActive Voiceであらわすパターンは、高齢層においては44%であり、伝統的なパターンよりも若干少なくなっている。

これに対し、若年層が連続する節に関して選択するヴォイスのパターンは伝統的なActive Voice – Passive Voiceの組み合わせが31%にとどまり、Active Voiceが連続するパターンは69%に及んだ。

これらの結果から、伝統的なヴォイス選択のパターンは若年層においても用いられているものの、より教育現場で推奨される現代的なパターンに移行していることがうかがえる。

このように、「インドネシア語口語変種」は話者の第一言語だけでなく年齢層や教育程度によっても影響を受け、移り変わりつつある。

記号

1sg	一人称単数の代名詞
3sg	三人称単数の代名詞
3pl	三人称複数の代名詞

AV	Active Voice に付加する接頭辞 <i>meng-</i> あるいは <i>ber-</i>
APL	applicative verb を形成する接尾辞 <i>-kan</i>
PV	Passive Voice に付加する接頭辞 <i>di-</i>
REL	関係節を導く <i>yang</i>

参考文献

- Adelaar, Alexander. 2005. 'Structural Diversity of Malayic Subgroup'. In Alexander Adelaar and Nikolaus Himmelmann eds. Routledge: New York.
- Chung, Sandra. 1976. 'On the subject of two passives in Indonesian. In Li, C. (ed.), *Subject and Topic*. Academic Press: New York. pp. 57-98.
- Cumming, Susanna. 1991. *Functional Change: The case of Malay constituent order*. Mouton de Gruyter: Berlin, New York.
- Macdonald, R. and Dardjowidjojo, S. 1967. *A Student's Reference Grammar of Modern Formal Indonesian*. Georgetown University Press: Washington D.C.
- Sneddon, James Neil. 2010. *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. 2nd edition. Revised and expanded b Alexander Adelaar, Dwi N. Djenar & Michael C. ewing. Routeledge: London, New York.
- 原真由子. 2009. 「バリ語ーインドネシア語コード混在と敬語使用の相互作用」. 『多言語社会インドネシア』 pp. 129-152. 森山幹弘、塩原朝子編著. 東京：めこん
- 稲垣和也. 2008. 「カドリ語ーボルネオ島のオーストロネシア系言語の記述ー」. 京都大学博士論文.
- 鏡味治也. 2009. 「インドネシアの学校教育に見る国語と地方語」. 『多言語社会インドネシア』 pp. 97-120. 森山幹弘、塩原朝子編著. 東京：めこん

Abstract

This paper examines the voice selection observed in the Bali dialect of Indonesian. Indonesian is sometimes said to have two grammatical voices, Actor and Patient voices, but sometimes to have three voices: Actor, Patient and Object voices. This paper takes the view that Indonesian has two voices. Verbs are categorized according to the prefix they have: verbs that have the prefixes *ber-* and *meN-* are categorized as Actor voice, and those with the prefix *di-* are categorized as Patient voice. Verbs that do not have any prefixes are also categorized as Actor Voice. The data examined in this paper were taken in 2016, from the speakers whose first language is Bali, and speaks Indonesian as the second language.

Speakers were asked to describe three short video films in which a girl performs a sequence of actions. It is often the case that people drop voice indicating affixes in spoken Indonesian, but they were not dropped in this description data. Therefore, the description situation is considered rather formal in which more standard morphology is preferred.

In eventive clauses in traditional Malay, Active Voice is found in the first clause whereas Passive Voice is preferred in subsequent clauses. As opposed to this, a sequence of Active Voice is recommended in instruction of Indonesian at school. The older speakers who were born between 1944 to 1969 prefer Active – Passive sequence, but younger speakers who were born between 1981 to 2000 prefer Active -Active sequence.

It can be said that colloquial variety of Indonesian is influenced not only by a speaker's first language, but also her/his age and educational background.

註

- 1) 通称ジャボデタベック (Jabodetabek) と呼ばれる地域に多くの人々が住んでいる。ジャカルタ (Jakarta) 首都特別州をはじめブカシ (Bekasi) 市、ボゴール (Bogor) 市、デッボック (Depok) 市 (以上西ジャワ州)、タゲラン (Tangerang) 市 (バンテン州)、の四つの地区の頭文字を合わせた名称である。これらの地域はインドネシアで一番多くの人口が集中している。
- 2) 接頭辞 *meng-* は母音で始まる語基の前では /meng-/、子音から始まる語基の前では /ng/ の部分が同じ調音位置の鼻音に変化する。ただし、/s/ で始まる語基の場合のみ、硬口蓋鼻音の /ny/ に変化する。
- 3) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、准教授